

毎月一四十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）



和清山香 會社  
 市田上野長 所行發  
 後學門縣野上 町原市田上野長 所印刷

### 統計的に観たる蠶絲業の將來

最近本邦蠶絲業の將來を論ずるに或は樂觀的に或は悲觀的にして其の歸するところを知らざるの有様である。爲に一般當業者は安じてその業務に就くを得ざるに聞くと、以て甚だ遺憾とするところである。

斯る際に於いて、この小論文が幾許なりとも諸君の御参考になれば幸甚の至りである。蠶絲業の將來を經濟的に論ずるの極めて必要なることは申すまでもないが、復雜化し容易にその將來を推測し得べくもないと思ふ。故に本論文に於いては第一に問題を單純化して論ずる事に留意し、單に其の生産數量上に於いて生絲が過去十ヶ年間に如何なる経路を辿り來つたか又各種纖維と如何なる關係を維持し來つたかを統計的に示さんとするのである。

第一表は昭和八年十二月農林省蠶絲局編纂の蠶絲業要覽に依つたものである。之の表に依ると世界纖維生産總數中に於ける生絲の生産數量の割合は過去十ヶ年間殆んど一定にして〇・六%を維持し來つたことが見られる。

而して之の割合は恐らく今後も維持されるものと思惟されるのである。

第二表は第一表の數字を用ひて一九二二年の其れを基準（一〇〇）となしたる場合の各種纖維の生産指數を示すものである。之れに依ると人造絹絲を除いたる他

第一表 (單位千疋)

年次	總數	生産數量					總數=對スル割合				
		棉花	麻	羊毛	人造絹絲	生絲	棉花	麻	羊毛	人造絹絲	生絲
1922	7210228	4106300	1796600	1225476	34820	47032	57.0	24.9	17.0	0.5	0.6
1923	7984827	4231300	2431100	1225980	49015	47432	53.0	30.4	15.4	0.6	0.6
1924	9128267	5301200	2474400	1233796	66201	52670	58.1	27.1	13.5	0.7	0.6
1925	10256080	5977300	2853200	1282088	86354	57138	58.3	27.8	12.5	0.8	0.6
1926	10941257	6095000	3316520	1370880	99372	59485	55.7	30.3	12.5	0.9	0.6
1927	9764889	5163000	2877920	1539709	121049	63211	52.9	29.5	15.8	1.2	0.6
1928	10514363	5806000	2911880	1572769	156284	67430	55.2	27.7	15.0	1.5	0.6
1929	10790444	5756000	3037460	1743034	183321	70629	53.3	28.1	16.2	1.7	0.7
1930	10815605	5634000	3148720	1771008	193547	68330	52.1	29.1	16.4	1.8	0.6
1931	9661053	5969000	1708880	1713399	212056	57718	61.8	17.7	17.7	2.2	0.6

備考 1931年の麻生産數量少きは大麻を含まざる故なり。

の纖維は過去十年間に於いて何れも一俣半前後の増加をなし減少せるものは一つもないことが解る。然るに人造絹絲のみは實に六俣の大きに達し吾人の注目に値するものがある。今その増加状態を伺一

第三表

年次	生絲	人造絹絲	棉花	麻	羊毛
1922	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
1923	1.01	1.41	1.03	1.35	1.00
1924	1.11	1.35	1.25	1.02	1.01
1925	1.08	1.30	1.13	1.15	1.04
1926	1.04	1.15	1.02	1.20	1.07
1927	1.06	1.22	0.85	0.87	1.12
1928	1.07	1.29	1.12	1.01	1.02
1929	1.05	1.17	0.99	1.04	1.11
1930	0.97	1.06	0.98	1.03	1.02
1931	0.84	1.10	1.06	—	0.96
平均値	1.02	1.21	1.04	1.07	1.04

第二表

年次	生絲	人造絹絲	棉花	麻	羊毛
1922	100	100	100	100	100
1923	101	141	103	135	100
1924	112	190	129	138	101
1925	121	247	145	158	105
1926	126	284	148	190	112
1927	134	346	126	165	126
1928	143	447	141	167	129
1929	150	523	140	174	143
1930	146	554	137	179	146
1931	122	609	145	—	140

層明瞭に知るために各纖維の生産増加率を算出すれば第三表の如くである。

此の増加率は勿論年に依り大いに異なるが之れを平均的に見ると人造絹絲は年二割強の増加率を示すに反し他は何れも其の増加率極めて小さく殊に生絲に於いては年二分の平均増加率を示すに過ぎぬ。

斯る人造絹絲の特異性は其れが新興産業なる故にして近き將來に於いて必ずや其の特異性は纖維業の一般性に歸納すべきものと思惟される。然し其の時間的問題になると之れは又自ら技術的經濟的諸要素に依つて決定されるものと言はざるを得ない。

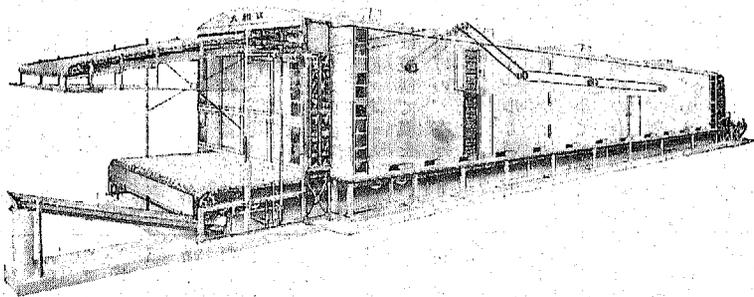
第四表

年次	生絲生産數量(實)	全生産指數	増加率	生産指數
大正12	6756040	1.00	100	
13	7577170	1.12	112	
14	8284317	1.19	122	
昭和1	9101310	1.10	134	
2	9880306	1.09	146	
3	10584232	1.07	157	
4	11292399	1.07	167	
5	11365026	1.01	169	
6	11682814	1.03	174	
7	11468394	0.98	171	
平均	—	1.06	—	—

得ない。以上簡單乍ら世界に於ける生絲の統計的な一端を示し得たと思ふが次に參考までに本邦生絲生産量の過去十ヶ年に於ける増加率並に生産指數を示すと第四表の如くである。（生絲生産數量は農林省蠶絲局調査に依る）

今本邦に於ける生絲生産増加率が平均的に世界の其れより高い事が解るが之れは本邦蠶絲業が世界的に見て一番盛である事を示すものである。之れを要するに本邦蠶絲業は現今の人造絹絲に於けるが如き特殊性は望むべくもないが現在程度が生産を維持する事は左程に困難でないと思はれる。即ち世界に於ける全纖維生産量中の〇・六%を生絲が占むる事は歴史的に不可能ではなく之の範圍内に於ける本邦蠶絲業の發展は充分の可能性があると信ずる。勿論過去に於ける統計的數字のみに依つて本邦蠶絲業の將來を論ずるの危険性は百も承知であるがこゝな考へ方もある場合には役立つかも知れぬと思つたから御参考までに發表した次第である。

## 現代乾繭機界ノ王座 大和式自動輸送乾繭機



一九三四年代表型

### 營業課目

- 特許大和式自動輸送乾燥機
- 特許帶川三光式乾燥裝置
- 特許やまほイロ
- 特許大和式熱湯自動還元機
- 特許水野式改良ロストル
- 特許アイエム.コールセnder
- 特許アイエム.ストーカー

### 製作發賣元

株式會社

## 大和三光商會

東京京橋區京橋三丁目二番地  
 電話京橋(56)五三二〇番

石井鶴三先生の面影

針塚先生銅像作者

明年度に母校二十五周年を迎へる事は誠に慶賀の至である。此の期に當つて、開校當初より校長として二十五年の永きに渡り、母校發展の爲に、日夜盡力せられて来た我等が慈父針塚先生の銅像が、千曲會員の手に依りて、建設される運びとなつた事は實に意義ある事と言はなければならぬ。

啓て此の意義ある銅像の製作を、斯界の權威者石井鶴三氏に依頼する事になつたことは、先月號の本紙に報告された通りである。故に茲に石井鶴三氏を諸君に御紹介しようと思ふ。

石井鶴三氏は東京下谷の出身、其の生家は今の下谷電話局となつて居る處にあつた。本年四十有八歳の働き盛りである。

同氏の藝術的手腕は既に諸君も御存じの事と思ふ。併し其才能は後述する如く氏の血の出る如き奮闘の賜物である事は勿論であるが同氏の血液には遺傳的に藝術的分子が流れて居るものと思はれる。

何故なら同氏の血縁は不思議な程藝術家、而も凡ならざる美術家が多いからである。試に同氏の系累から紹介しよう。

先第一に、同氏の四代前の先祖が大津繪佛心である。次の代、即、曾祖父のみは美術を業としなかつたが、祖父は畫家鈴木鷺湖、義祖父は陶家三浦乾也であつた。共に、美術史に名を残して居る人である。更に父は鼎湖と言つて祖父鷺湖の養子となつた人で、鶴三氏は其の四男四女の中第五子、三男である。而して、其の長兄は洋畫界の重鎮柏亭氏である。

父鼎湖氏は、壯年時代ずつと印刷局に勤め後、官を退いて純畫家生活に入つたのであるが、僅かに兩三年ものしたのみで、五十才にして此の世を去られたので

あるから、社會的には餘り知られて居ないけれども、其の天分には並ならざるものがあつたのである。

斯く見ると、石井鶴三氏の藝術的天分が決して偶然ならざる事を知る。而も、今日の石井鶴三氏を世に出す可く、天は決して練磨を忘れなかつた。然らば、如何にして此の天才を練磨したかと言ふに此處に吾人は益々今日の同氏の藝術が偶然でないものである事を知り、一種、敬虔の念にさへ打たれるのである。其れは同氏の生立である。其れは同氏の奮闘の歴史である。藝術的血液に充たされて、此の世に生を受けた一個の隠された天才が凡ゆる苦行と、凡ゆる試金石にかけられて遂に藝術家としての洗禮を受ける物語りである。筆者は敢へて物語りと云ひたい。次に筆を更めてそれを物語らう。

父鼎湖氏が永眠されたのは、鶴三氏が僅か十一才の少年の時であつた。當時長姉一人は嫁がれて居たが、長兄の柏亭氏は中學を二年で途中退學して、印刷局に勤められた程であるから、決して裕福な生活ではなかつたことがわかる。母堂は大勢の子供を抱えて、鼎湖氏の臨終の枕邊に涙に暮れながらも男々しく、

『子供達だけは立派に一人前に育てますから、どうか御安心下さい』

と力強く言ひはしたものの、決して夫は容易な仕事ではなかつた。収入と言つては弱年の柏亭氏の俸給のみである。併し母堂の決心は強かつた。一家族力を合せて、努力と苦難の生活が始まつたのである。かくて、運命の神は少年鶴三氏に對しても決して平坦なる道を歩ませては呉れなかつた。同氏は間もなく、千葉縣船橋町在に薪炭商を営む叔母の家に養子として引取られる事になつた。此の頃だ。

秘められたる藝術家鶴三氏は、ゆくゆく薪炭商となる可き運命に投げ込まれたのである。斯くて運命の悪戯に、小藝術家は一個の馬鹿息子として、家人の目に映じたのである。商賣を見習ふより屋根裏に這ひ込んで、密かに、畫を描く事の方が好ましかつた同氏は、薪炭商の家人には意者以外の何者でもなかつた。結局實家に送り返される事となつて、貧しい實家は又一人の家族が増えたのである。當時鶴三氏は十七才であつたが、既に彫刻をやつて居たと言ふ念止み難く、遂に小山正太郎氏の不同舎に通ふやうになつた。是が正式に畫を勉強した最初である。他方彫刻の方は遠縁に當る、高村光雲の直弟子加藤雲雲氏に就いて木彫を學んだ。此頃にも又、薄運の一家に不幸が訪れて来た。丁度、日露戦争の頃である。印刷局から新潮社に轉じ、収入も漸く増加して居た長兄柏亭氏が、眼疾のため職を續ける事が出来なくなつたのである。そこで此の大家族の生活を、年少の鶴三氏が見なければならぬ事となつたのである。愈々同氏の眞の苦闘の幕は切つて落されたわけである。天才に對する天の練磨が宣告されたのである。此の時折よく、東京バツク社に職を得て、二十圓の俸給を得る事が出来た。當時、二十圓の月給は弱年の無名畫家の俸給として、決して少ないものではなかつた。併し、大家族を養ひ、而も其上、學校に通つて素志を貫かうとする同氏にとっては、理屈ではどうしても、收支償ひ得ない程のものであつた。是れに就いて、最近まで秘められて居た美談がある。それは當時同じバツク社に机を並べて苦學して居つた、山本鼎湖氏である。山本氏は友人鶴三氏の超人的苦闘と、その意氣に感動して『石井は自分達と違つて、其の収入で學校へ通ふ外に、大家族を養つて居る。事情を知つて居る自分は唯見て居るに忍びない。どうか自分の俸給の中五圓を割いて

石井に與へて欲しい。併し、石井の性質として、事實を打明ければ斷じて辭退するに決つて居る。社から黙つて彼の俸給として渡して欲しい』

と當時の主幹北澤樂天氏に申し出たのである。樂天氏は、此の友情に感激して山本氏の言を用ひた。斯くの如き美舉に依つて、鶴三氏に二十圓の俸給が與へられて居たわけである。天は一方恐ろしいまでの練磨で、此の天才を鞭打ちながら、他方見えざる慈愛の手で滑かに、その保護を怠らなかつたわけである。此の事は北澤氏が某雜誌に、最近發表するまで秘められて居つた世にも美しい友情の美談である。

當時そんな事を知る由もない鶴三氏は二十圓の俸給に苦しいながらも、感謝しながら奮闘を續けて居つた。二十圓の中、十九圓は母の手に渡し、残りの僅か一圓を自分の小遣として居つた。一圓で辨當も食つた、湯銭にもした、被服費の一部にも當つた。それは數量的には考へ得られない經濟であつた。嚴寒に、冬シヤツ一枚の上に、合の詰襟一着で毎日バツク社に通つた。夜の十一時頃、有樂町から駒込へ歸る本郷通りは身を切る様に寒かつた。併しその寒さよりもつと苦しく堪へ難いものは、空腹であつた。當時同氏は一日一食、後は豆餅で飢を凌いで居つたのである。夜更けの、本郷通りは寢静まつて居る。早く家に歸つて寢たい、併し鶴三氏の足は、もう一步も前へ出る元氣すらなかつた。北風は身を切る程寒

い。毎日の苦闘に体は疲果て、居る。空腹を抱えながら、一高前の石垣に腰を下して靜かに目をつむつて、暫らく黙然として休んだ。それでも、かうして幾分の元氣を取り戻して家路に急ぐのが常であつた。而もその我が家には、火種一つ待つて居るわけではなかつた。冷たい煎餅蒲團にくるまつて、明日の元氣を回復した。將來の藝術家を夢見、動もすれば

身も心も挫けて終ひさうになる自分自身に鞭打つた。是が鶴三氏の青年時代である。斯くて遂に、難關を切り抜け、美術學校も卒業したのである。強い意志は遂に職ひ獲つたのである。此の時代を通して、その藝術に他人の追隨を許さない、何物かが築き上げられたのである。それは斯の如き苦闘の洗禮を受けた同氏のみ、天が與へた所のものでなければならぬ。

世に困苦窮乏に堪える人はないではない。併し鶴三氏の如く、身を窮乏のどん底に處して、よく一家の生活を支へ、且一方では美術學校に通ひ、正規に業を了へ、其の間、奮闘に苦闘を重ねて素志を貫いた強靱なる意志は、全く常人の到底及ぶ所ではない。斯くて石井氏の藝術は稀なる天分と、超人的努力との結晶に依つて力強く形造られて居る。

氏の本來の専門は所謂木彫であるが、然し、塑造も、油繪も、水彩畫も、日本畫も専門家として決して他の追隨を許さないものを有つて居る。更に氏の文章は識者の認めて居る處である。實に何れが専門何れが餘技なるかを知らざる感があるのである。稀なる天分を、吾人はそこに見出すのである。而も氏は此の天分を前述の如く練磨して来た人である。故にか氏は製作に従事するや常に超人的努力を注ぐのである。寧ろ命がけと言ふも過言でない位である。

氏は銅像製作に當つて、職業的銅像彫刻家の如く、寫眞に依り銅像を作製する様な事をしない。どこまでも實物其のものをモデルにして、其の人と精神的に結合して、製作を完成しなければ止まないのである。以上御紹介した如き石井鶴三氏に依つて、慈父針塚先生の銅像が製作される事になつたのは誠に喜ばしき限りである。(石井鶴三氏に就き聞き及びたる所を記す。東京 濱生)

秘められたる藝術家鶴三氏は、ゆくゆく薪炭商となる可き運命に投げ込まれたのである。斯くて運命の悪戯に、小藝術家は一個の馬鹿息子として、家人の目に映じたのである。商賣を見習ふより屋根裏に這ひ込んで、密かに、畫を描く事の方が好ましかつた同氏は、薪炭商の家人には意者以外の何者でもなかつた。結局實家に送り返される事となつて、貧しい實家は又一人の家族が増えたのである。當時鶴三氏は十七才であつたが、既に彫刻をやつて居たと言ふ念止み難く、遂に小山正太郎氏の不同舎に通ふやうになつた。是が正式に畫を勉強した最初である。他方彫刻の方は遠縁に當る、高村光雲の直弟子加藤雲雲氏に就いて木彫を學んだ。此頃にも又、薄運の一家に不幸が訪れて来た。丁度、日露戦争の頃である。印刷局から新潮社に轉じ、収入も漸く増加して居た長兄柏亭氏が、眼疾のため職を續ける事が出来なくなつたのである。そこで此の大家族の生活を、年少の鶴三氏が見なければならぬ事となつたのである。愈々同氏の眞の苦闘の幕は切つて落されたわけである。天才に對する天の練磨が宣告されたのである。此の時折よく、東京バツク社に職を得て、二十圓の俸給を得る事が出来た。當時、二十圓の月給は弱年の無名畫家の俸給として、決して少ないものではなかつた。併し、大家族を養ひ、而も其上、學校に通つて素志を貫かうとする同氏にとっては、理屈ではどうしても、收支償ひ得ない程のものであつた。是れに就いて、最近まで秘められて居た美談がある。それは當時同じバツク社に机を並べて苦學して居つた、山本鼎湖氏である。山本氏は友人鶴三氏の超人的苦闘と、その意氣に感動して『石井は自分達と違つて、其の収入で學校へ通ふ外に、大家族を養つて居る。事情を知つて居る自分は唯見て居るに忍びない。どうか自分の俸給の中五圓を割いて

上原安夫君臨終の記

岡部康之

『上原君の生涯は全く一編の小説だ。是れを創作家の手にゆだねたら随分面白いものが出来るであろう』など御通夜の晩、遺骸の前でしめやかに語り合つた。上原安夫君三十年の生涯は餘りに奇蹟を極めたもので、到底凡筆を以て其真相を傳へる事は出来ぬ。此處では單に臨終の模様を御傳へする事とする。

上原君は埼玉へ来て一年餘になりその大部分は比企郡松山町の蠶業取締支所に勤務し五月七日突然秩父郡秩父町の支所へ轉勤せられたのであつた。

病軀を押して赴任し未だ二週間もたぬのに、誰れ一人肥瘠の人も無い秩父で淋しく逝去して了つたのである。

秩父山下の淋しい寓居に泣き崩れる、若き未亡人保子さん、生れて二ヶ月のたぐましい顔をしてニコニコ微笑さへ溢へた長男浩君、看護に來られて未だ二三日しかたぬ上原君母堂及令妹きよ子さん……を枕頭に殘して……。

嶮岨な學業の山坂を難行苦行を重ねやつとの事たどり盡して爾來二年許りの間に卒業、任官、結婚、長子誕生、と矢張り早やに御目出度い事が重なつて、ホツトする間も無く逝かねばならぬ君はどんなに生きてたかつたらう。石に噛りついても死にたくは無かつたらう。

五月七日電話で唯簡單に『僕上原です。が今度秩父へ轉任を命ぜられました。では何れ又』との齒切れの良い口調で君の報告を受けてから十二三日経過して奥さんから突然ハガキを貰つた。夫れには簡單に四月下旬から氣管支炎を患つて居

たが秩父へ来てドット寝込んで了ひ、醫者が、腦膜炎になると困るかと心配して居ると書いてあつた。

死去の前日即ち二十二日夫れ程悪いとは思ひも思はないで御見舞に行つた。引越してすぐ、醫者駈ぎをして何處へも顔も名前も知れて居らぬサラリーマンの寓居を捜し出すにはかなり骨が折れた。漸くの事で見付け出し支關へ這入ると奥さんと母堂とが、ワット泣き出され『もう駄目なですよ』と病床に招き入れられた。

『Oサンが來て下さいましたよ、Oサンですよ。Oサンですよ』と連呼する奥さんと共々『上原君、上原君！』と呼びつけた。

然し目も口も閉じて返事がない。もう昨日から意識不明となり一昨日でさへ朝鮮の北澤さんからの御手紙をさかきに見る様な状態だつたそうである。

然るに其の日の午後四時頃不思議にも眼を開き手を差し延べて私の手を堅く握りかすかに『奥さん帝大……』と僕の室内がロイマチスで臥床し最近帝大病院の診療を受けに行つた事を知つて見舞の言葉を發して呉れたのである。

二十二日夕景には目も口も全然役に立たぬ状態となり奥さんが、『お水をおあがりなさい』と取水器を口元に持つていつても齒を開かなかつた。然し、耳丈はかなり完全な様に見受けられた。体温は平熱に近い。顔色は蒼白で髪は伸び腫膜炎の手當として氷枕や氷嚢が用ひられてあつた。そして激痛を緩和する爲めに醫師が何度となく注射し今朝既に他の醫師と立會診断を受け、とても助からぬと宣告されたさうである。

でも私はあきらめ切れぬまゝ、醫師の許に走り色々真相を確かめたが、急性の腦膜炎で百%駄目であるとの話であつた。

上原君は確りと奥さんの手を握つて居る。奥さんが色々と聲をかけ『判つたら確りと握つて御覽なさい』と云ふと、力強く握り返すのであつた。之が意志表示のたつた一つの手段であつた。

グッと見守つて居ると何んとはなしに奥さんの手を離るゝ事が、一刻も堪へられぬやうに就はれたので『奥さん、確りと握つたまゝ、附いてゐて上げて下さい』と私は云つた。

握手に依る合圖の中に何か書き度い様な動作が感知されたので、奥さんにすゝめ鉛筆を持たせた。

ノートを擴げて『さあ何か書いて見給へ』と云つた處が、盛んに鉛筆を走らせ

私はノートを支へ走り書きするに従つて、ノートを移動させ、出来る丈讀み取り易く仕度いと勉めたが判讀し得たものは左の數項目に過ぎなかつた。尤も遺言は二三日前腦膜炎らしいと判つた時夫れ『言ひ殘されたさうである。』

『人生』『最後に』『釣竿』『岡部』『オカベヤスキ』『きよ子ちゃん』『山の父』

『きよ子ちゃん』と云ふのは妹さんの名である。『山の父』と云ふのは恰度二十一日夕景見舞に來られ、附添ふて居られた奥さんの父君山形(松本附近)の御父さんと云ふ意味である。『釣竿』と云ふのは上原君と最後に熊谷の私の宅で談じた時私が示した左の七言絶句の詩である。

つた時、昔の友人子陵を呼び上げ推すに三公の榮職を以てしたが肯んぜず一釣竿に身を委ねた子陵の高節を叙した七言絶句である。

臨終に此詩を思出してか、一釣竿の三字を記した事は私にとつて實に感慨無量であつた。子陵の高節を想起しつゝ、上原君は盛んに鉛筆を走らせて余に心情を物語つて呉れたのである。噫。

上原君は今頃何處で一釣竿を樂しんで居る事であらうか。

其後深い眠りに落ちて了ひ到頭翌二十三日正午永眠された。長い間の手厚い奥さんの看護も空しく……。二十三日夜は千曲會員夜を徹して故人の事ども物語りつゝ、諸準備を整へた。

翌二十四日は故人の同郷で同期生である眞木君が活動して、午後二時より二時半迄に告別式を舉行し秩父蠶業取締支所、試験場支場員及縣下各蠶業家代表者の見送りを受ける肉體は武甲山下に茶匙一片の煙と化して去つた。

二十五日午後一時四十分私は熊谷驛で故人の遺骨を捧持し昔に浩君を負はれた保子未亡人、上原君母堂、令妹及親戚の方々を涙を押しかくして見送つた。

親戚總代として走付け萬端の世話をせられた、上原君の義兄高橋氏は通夜の晩しみんと述べられた。『此佛位苦患の一生を送つた者はありません。小學校を出ると準教員の試験に合格し進んで、長野で通信講習を受け、木曾福島の郵便局に勤める事になりました。局長さんの御世話で木曾山林を卒業し、更に東京高師と上田蠶業と受験しましたが高師は合格ではずれ蠶業に入學しました。』

援助に依つて卒業する事が出来ました。在學中病氣の爲め二年休學した事があり其際も晝は稅務署に勤め夜は簡易生命保險の勤務をする云ふ様な次第で實に苦勞し抜いたものです。蠶業卒業後は半歳私の家に居りました。立川の蠶業取締支所へ勤務する事になつた時は、實に喜び勇んで、私が作つてやつたあの冬服を着て赴任しました。結婚問題に付いても、小林さん達の御盡力で……と物語らるゝ中に同君の一生が如何に難行苦行であつたかが想像に餘りある。

毎月支拂はねばならぬ奨學金返済の事は君の最も苦にする處であつた。朝鮮へも往つたらいくら収入も増すだらうと其運動の途中に逝去されたのである。

例の臨終のノートには未ださう酷くならぬ内のものも書き殘されてゐた。有名な俳句『目に春葉山時鳥初戀』など君の文學愛好の片鱗を物語るものもあり又朝鮮大邱〇〇學校教諭など理想の跡を偲ばせるものもあつた。上原保子、上原保子と記されて居るのも永く奥さんには涙の種であらう。

上原君はつい先頃同窓生の縁談で寢食を忘れて奔走された事があつた。その熱烈なる至情に當事者は終始感動したのであつた。君の義侠的心情を躍如として偲ぶ事が出来る。

二十七日附長野縣南佐久郡中込町上原保子夫人からの御便りにこう記されてゐる。前略御免下さいませ。奥様は其後如何でいらつしやありますか。安夫他界に就きましたは一方ならぬ御心配に預り厚く御禮申上げます。二十六日お葬式も無事に済みました。有難うござぬました。今後は浩の成長を楽しみに力強く生きる決心でございます。では亂筆おゆるし下さいませ。御禮まで

御禮まで

上原君臨終の事共を御傳へしやうとして、ペンを執つても、餘りの悲愴さに胸迫り花再日を過したのであるが、思ひ出す儘に感じた儘を一行々々と目を重ねやつと此處迄記した次第である。

上原君の死を悼み、君の御遺族に多幸ならん事を祈りつゝ、ペンを擱く。

(昭和九年六月二日夜)

### 亡友上原安夫君を憶ふ

平尾孝平

五月二十三日、畏友上原安夫君遂に逝去さる。此の驚きと悲しみ、生後未だ三ヶ月の長男浩君と共に残された御夫人と御両親を見る時誰か又涙なきを得ん。長き闘病の経験ある君も遂に膈膜炎なる病には勝てず此處に恵まれざる一生を終られてしまつた。御一家の興亡を頑健ならざる双肩に擔つて責任重く、不遇なる生活の中にも長男を擧げられてからは一路躍進の意氣に燃えて居た君には誠に死んで死に切れぬものがあつたに違ひない。

君の生立及び死の前後の事は岡部氏の文に詳しい故此處には君在りし日の思出を綴り君の靈を慰めんとす。

私が二年に進級した時休學して居られた君と一緒に、隅の机に席を占め長身瘦軀、病身らしい無口な君が静かに窓外の雲の動きを凝視してゐた姿が最初の深い印象となつた。

幼少より苦勞せられた君は理性に勝ち世才に長け且つ事務的手腕に長じてゐた僅か二年間の取締所勤務にも業務の上を示した技術は敬服すべきものがあり君一人にまともな上げた報告の類も少なからぬと云ふ。君の前途望み多く才賦又頼むもの多かつたのである。

君は強く見ゆる性格の反面には多感な神經と激しく燃え上る藝術家的熱情とを有してゐた。そうした君は必然的に君と相通するところの熱情詩人石川啄木の詩歌を好んだ。

君の文才と情熱その悪戦苦闘の生涯と悲壯なる最後を想ふ時重荷を負ひ、貧と病の中に倒れた詩人啄木の生涯に相似たものがあるを想ふのである。雄々しくも生きて行く爲めの壯烈な意氣の裏には人にも云へない人世に對する激しい反感と憤りとを持つてゐたに相違ない。爆發せんとする感情を僅かに詩や歌に依つて慰めてゐた。とり分け君は短歌をよくした。君の性格を反映しその有する文學的才能より生れ出る歌は生々しくも深刻に讀む人を打つものがあつた。

君が遺作の二三を拾へば、

戸外には雪降るらしこの夜更け  
友よ憫を語れと云ふか  
年越せば來し方すてつづなし  
この悲しさを君に慰む  
夢さむればその淋しさに耐えかねつ  
妻と語りて夜を明かすかな  
故郷はなつかしき里故郷に  
歸る心を祈りて慰さむ  
東武疎林の軟く泣くごとく  
春たつらしむかけのふの 燃ゆ  
つゝましく暮さむと言へばうなづきぬ  
君にしあれば心みちたり

君は又木曾節がうまかつた。木曾は君が苦悶の幾年かを過したところ。秋夜月中空に芽えて四邊音なき頃、興湧き感あつて低聲に歌ひ出す君が木曾節を聞く時は山氣肌に迫り檜の香漂ふ木曾谷の夜を思はしめた。又歌ひ終つて電燈を消した部屋に窓に何時迄も月光を浴びて黙思してゐる君の姿をよく見たものである。

君の如き性格の人間は少い。而して君の如き人物こそ世は要求してゐるのであるまいか。鈍筆動かすよく君が人と爲りを現はし得ないかも知れぬが今は幽明境を異にする君が靈を想ひ過ぎし日を追憶するの餘り一文を草し以つて君が冥福を祈る次第である。

佐久高原なる君が奥津城の前にて  
大樹茂る友の奥津城靜かにて  
この高原に雲立ち渡る

### 謹告

故三谷徹君は東京蠶業講習所及上田蠶絲専門學校に職を奉ずること三十有餘年一意専心子弟の教養と製絲學の研鑽に盡せられ我蠶絲業界に貢献せる功績の多大なるは普く人の知る所なり。今や業界の非常時に際し同君に尙期待する所極めて大なるものありしに不幸昨夏病を得療養は努められしも其の効なく去る三月四日東京に於て長逝せられたるは誠に痛惜の情に堪へざる所なり。茲に一同相謀り君の功績を永遠に傳へ且は御遺族慰安の一方法として汎く資金を募集せんす。希くは發起人の微衷を諒せられ左記要項御承知の上奮御賛助あらんことを。

昭和九年五月

- 一、御 送 金 受領の上は領收書を添附す
  - 一、應募期限 昭和九年八月末日迄
  - 一、募金拂込場所 上田蠶絲専門學校内故三谷徹君記念資金管理事務所 林貞三宛(振替貯金口座東京四三三三三番)
  - 一、使 途 御郷里へ建碑其他 詳細は實行委員に一任願たします。
- 一、御 送 金 受領の上は領收書を添附す
- |        |        |         |        |
|--------|--------|---------|--------|
| 阿形 龍司  | 有賀 文雄  | 岩淵 平介   | 井上 柳梧  |
| 石倉 新十郎 | 内田 浩   | 大瀧 照太郎  | 岡 徳治郎  |
| 沖澤 善徳  | 織田 博   | 金子 英雄   | 游生 俊興  |
| 倉澤 寛孝  | 佐藤 利一  | 佐藤 春太郎  | 下田 敏夫  |
| 清水 三治  | 竹内 與三郎 | 高橋 伊勢次郎 | 野口 新太郎 |
| 高木 三治  | 坪井 啓作  | 長岡 哲三   | 林 貞三   |
| 針塚 長太郎 | 早川 直實  | 原田 卓爾   | 福本 貞三  |
| 肥後 俊彦  | 藤村 季也  | 藤田 卓爾   | 宗像 宗三  |
| 本多 岩次郎 | 吉澤 彌吾  | 水井 壽一郎  | 宗像 宗三  |
| 吉野 文藏  |        | 和仙太郎    | 遠藤 保太郎 |

### 黄色い雑誌の願ひ

蠶絲業も愈々眞剣勝負の秋です。夫だけに皆様に亦特別御多忙の事と拜察いたします。

蠶絲業も愈々眞剣勝負の秋です。夫だけに皆様に亦特別御多忙の事と拜察いたします。

其處で此の雑誌の活殺の鍵は實に千曲會員、言ひ換へれば讀者諸兄の手中に在るのであります。苟くも蠶絲業に關係してゐる人である限り、蠶絲業の衰微を期待する様な謀叛者又は意氣地無しはある筈はなく従つて夫々何等かの方面で、色々の研究調査を爲されてゐる事と信じます。きつと良い問題を藏されてゐるに違ひないので。其れ等の各位から數多くの原稿を寄せて頂く事はそんなに難事ではない筈ですが遺憾されてゐる方もある。爲か遺憾ながら現在では稍困難の状態です。今は實際は遠慮される時期では無いのですが之には又我々編輯子の努力或はサービスが足らぬと云ふ事も充分認めて居る次第ですが。

そこで今申上げた様な意味合から一、讀者で無い方は今後齋然年輩圖の會費で讀者になつて利用して頂く事。二、更に進んで本誌の爲に、報文調査資料抄録等何れなりとも遠慮無しに御寄稿願ひ度い事。三、會員外の方へも之を購讀し利用して頂く事をお奨め願ひ度い事。四、本誌の存在を一時忘却されてゐる方は今改めて思ひ直して頂く事。等の項目を満足して戴きたいのであります。

原稿募集

差當つて第七巻 第一號を編輯いたし度いと思ひます。就ては時節柄御多忙の事は良く存じ御察し致して居りますが、敢て貴重時間を御割愛下さつて自分等の雑誌の一頁なりとも御飾り下さらん事を重ねて御願申上げる次第であります。

締切七月十日、發行八月十日

原稿用紙は御一報下されば直ちに御送り申上げます。(六月八日山口)

### 上田便り

#### 少年團縣聯盟總會

少年團縣聯盟第一回總會は五月十三日上田市に開催した。雨天にも拘らず元氣に満ちた縣下の健兒五百餘名參集し午前は事務總會で事業報告、豫算決算、各團隊提出事項等あり。午後一時から健兒總會に移り皇恩社を五十四團隊に傳達、日本聯盟長代理赤岡參事の視察等あり、各團の競技及び遊戯に興じ午後三時半盛會裡に終了した。

#### 生物研究所地鎮祭執行

菅平大明神澤一帶九万坪の地に建設する事に決定した文理科大学の菅平高原生物研究所は一切の準備が整つたので五月十五日地鎮祭を執行したが第一期工事は千六百圓を以て廿七坪の事務所を建設し其れより一万余千圓を投じて研究所を建設するものであるが事務所は七月下旬迄に完成し夏期休暇中は同窓八木博士が同地に來り研究すると云ふ。

#### 朝日新聞の定期航空機が上田に寄航

本年で六年目を迎へた朝日新聞社の東

京新潟間の定期航空はいよいよ五月十六日から又開始せられる事となつた。實施期間は裏日本の氣象の關係上十月十四日迄の五ヶ月間の豫定で其の間毎週月、水、金曜日に往復飛行を行ふ。然して同航空路中の上田飛行場には例年の如く不定期に寄航する事となつた。

淺間から菅平の新名稱

兼ねて上田温泉電軌會社が募集中であつた淺間山から四阿、猫岳、菅平高原一帯にわたる上信國境の名稱は應募點數百八十四點、名稱別百四十三點中から五月二十日審査の結果上信高原が一等となつた。其他の重なるものは上信連峯、淺間猫岳連峯、猫岳連峯、北信高原、みずぐ高原、上信高地、上信國境等があつた。

市警射撃場竣工

軍都上田に舉がる軍事熱から生み出された市警射撃場は之の程完成したので五月廿七日午後一時から開場式を舉行した。同射撃場は總工費四千七百三十四圓で其の内母校々友會で四百二十五圓負擔し太郎山々麓黄金澤地籍に建設した。標的は松本聯隊と同一の廻轉式でそれ弾があつても土中に吸收する様に出来て居り射場の如きも二百米と三百米の二個所を有し縣下に誇る模範的のものである。尙市では使用條例を制定し各團體の射撃演習に便する筈である。

大キヤラバン隊來る

本年四月下旬大阪市を振出しに全國各地を訪問展覽會を開いてゐる日本ゼネラルモーターズ會社の大キヤラバン隊は五月廿九日午後四時頃線路を和野峠を越へて上田市に來り市内櫻木町の自動車々體検査所に三四年型新シボレー二十餘臺を陳列、一般公開觀覽に供し夜は市内白銀町池野がレージに於てトーキーの映寫會を行ひ終了後長野市に向つた。

松本聯隊の凱旋

久しく北滿各地に轉戦赫赫たる武勳を輝かした松本歩兵第五十聯隊は今交代

歸還する事となり同隊所屬上田出身勇士九名は五月三十一日午後三時十一分上田驛著列車にて二年振りになつかしの郷土へ凱旋した。

上田出身眞保正子嬢 ロンドン行に決定した

上田市新田出身大阪泉尾高女教諭眞保正子嬢は豫選の成績二回共悪しくロンドンの大會に出られるかどうか案じてゐたが今回いよいよ國際女子オリンピック派遣手に決定し五月廿一日神戸出帆の白山丸で出發した。

幼兒大運動會

本縣社會事業協會並に日赤支部愛婦上田支部主催、小學校其他各種團體後援の上田市愛護週間は「強く正しく愛らしく」をモットーに六月一日から七日迄催されが第一日の六月一日午前八時半より市警運動場に於て幼兒大運動會を開催、満三才より學齡迄の幼稚園慈苑園其他一般の幼兒一千餘名の参加を得て遊戯に體操に可愛い子供達の爲め意義ある一日を過した。

自動車検査所竣工

自動車協會上小支會が總工費一万餘圓を投じ市内櫻木町丸子鐵道上田東驛北側に建設中であつた自動車々體検査所は此の程漸く内外共に完成したので六月二日献納式を舉行した。同検査所の敷地は六百四十坪で五間に十五間の検査場及五間に七間の事務所からなるものである。之に依つて東信方面の自動車はわざ／＼長野迄検査を受けに行く煩を省ける事となつた。

菅平、鳥居峠行乗合 運轉開始及運賃割引

冬期中は積雪の爲めに馬權と化けてゐた乗合自動車は六月三日から九月二日迄土合、菅平、鳥居峠間を運轉する事になつた。一日四往復、料金往復六十錢である。之れで菅平ホテル及新鹿澤温泉旅舎の玄關迄横付けが出来た事となつた譯である。尙右期間中同地方來遊客の便を計

り上田温泉北東線、川西線各驛から菅平に至る往復に對し電車四割、自動車(眞田菅平間)三割五分引とする事になつた。

菅平開發に稲田男爵乗出す

日本スキー聯盟會長稲田男爵等は菅平開發の一大土地會社を設立の計畫で兼ねて北信牧場の柄澤氏との間に二百數十町歩の土地賣買を交渉中の處十五萬圓で契約成り一部の手附金を授受したとの事である。

菅平が縣立公園候補地に 擧げらる

縣では縣立公園計畫に就き過般來種々詮衡中であつたが今回其の候補地として菅平高原外九個所を指定し之れを中心にして詳細な調査を行ふ事となつた。

ハイキングの好適地を紹介

長野運輸事務所では近頃漸く盛んになつて來たハイキングの趣味を普及する事になつたが其の内上田經由のものは左記四個所である。

鳥居峠(一、三六二米) 上田から眞田迄

電車四十錢眞田から湛澤迄三十錢峠迄四十錢附近に新鹿澤温泉、田代池などがある。淺間やアルプス連峯の眺め格別。

保福寺峠(一、三四五米) 上田から青木

迄電車三十五錢青木から菅掛温泉迄自動車十五錢、眺望はアルプス連峯と千曲川や上田市一帶。

十観山峠(一、一〇〇米) 上田から青木

迄電車三十五錢青木から田澤温泉迄自動車十五錢眺望は保福寺峠と略同じ。

菅平高原(一、二〇〇米) 温泉眞田から

自動車五十五錢眺望はよくキャンピングにも好適、鈴蘭の名所であらび狩にもいゝ牧場もある。

母校ニユース

五月九日十一時五十分突如サイレンを鳴し新講堂出火を報じた。日頃訓練上々の職員業手學生等は直ちに定められた部署に就き消火演習を行ひ學校長は之を巡視した。好成绩にて演習終り全員水に濡れた新講堂前に集合し學校長の訓示、石倉講師の電氣に對する注意、及び上田警察署長の消防の話があつた。(寫眞は消防演習の實況である)



(上田市：三井寫眞館撮影)

とす。 人絹工場運轉開始 母校の人絹工場の設備は高専校中第一を誇るものであるが今回金子教授、香山助教授、林講師、大塚副手等の手に依り本格的に繰業を開始した。氣候も丁度青葉繁る五、六月を迎へて申分無く紡出状況頗る順調、製品はステープルファイバーは勿論、絹との混紡混織等生絲の新局面開拓に向つての研究に供せられる筈になつてゐる。

母校勤務同窓生の移動

六川忠一郎氏(蠶一八) 養蠶科園場部に副手として勤務せられた同氏は家事御都合に依り辭せられ今後は囑託として時々母校に見えられる事となつた。

大木定雄氏(蠶一九) 製絲科林教授の下に副手として主に製絲機械方面に就て研究せられてゐた同氏は今回群馬縣工業試験場本場に榮轉せられる事になり六月四日赴任せられた。

百瀬正氏(蠶廿一) 養蠶科生理部に副手として勤務せられた同氏は五月廿五日長野縣養蠶試験場に榮轉せられた。

濱村一彦氏(蠶一九) 養蠶科原蠶部に副手として勤務せられる事となつた。

副田好美氏(蠶廿一) 蠶絲化學教室井上教授の副手として勤務せられる事となつた。

高原生物研究所の敷地測量

養蠶科山口助教授、齋藤副手の兩氏は五月二十四日文理科大學の委嘱に依り同大學高原生物研究所の敷地測量の爲め菅平に出張された。丁度鈴蘭が眞盛りであつたさうである。

養蠶科二、三年生の縣内視察

五月三十一日及六月一日には三年生が二組に分れ前者は佐藤(春)教授と、茅野副手、後者は山口助教授と平尾副手引率の下に長野方面の視察を行ひ長野縣蠶業試験場、農事試験場、長野放送局を見學した。又六月一日二日には二年生が二班

談話會例會

談話會例會は例に依り金曜日午後四時から第十一教室に開催された。 五月十一日 萩原 清治 大日本農學會報告 萩原 清治 桑葉の硬軟(水分)と蠶兒血液量及び絹絲腺水分との關係に就て 枇杷木 龍雄 五月十八日 背脈管壁の組織的構造 蒲生 俊興 一、空氣の濕潤度と絹絲(生絲)の性状變化關係試驗 須江 辨三郎 五月二十二日 一、銘仙セミ加工に就て 小林 尙一 一、ルシヤテリ、アラウンの原理に對するプランクの研究 原田 親雄 養蠶科が蠶兒飼育にて多忙となりたるに依り今學期の談話會は本回を以て中止



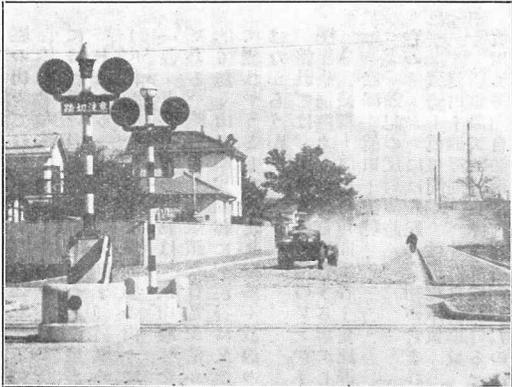
- 係 林 貞三 倉澤 美徳
- 野口新太郎 都筑 貞吉
- 和田 主計 竹下 文英
- 小林 清丸 小松忠一郎
- 中村 恒雄 本山 傳
- 教 菊雄(千曲)
- 齋藤 直一(千曲)
- 猪坂 晋(千曲)
- 和田 眞吾
- 池内 眞吾
- 原田 親雄
- 松村 季美 野口新太郎
- 山口定次郎 春原良太郎
- 清水 運策 鷹野 誠一
- 町田 博 塚本 優
- 小林 繁(千曲)
- 祝典係長 佐藤 利一
- 内藤 榮吉 小山 滋
- 大原 賢治 宮坂 收
- 平尾 孝平 戸部 正久
- 成瀬 次男 町田 博
- 瀧澤 敏次
- 飯島 正胤(千曲)
- 警備係長 金子 英雄
- 谷 弘 健二
- 廣川 正治 石井 清司
- 林 太郎 齋藤 利雄
- 山本 賢市 宮原大正治
- 須江辨三郎 宮原大正治
- 佐藤 春太郎
- 内田 寛 浩
- 清水 寛 孝
- 目崎 三郎 依田 啓藏
- 春原良太郎 林 太郎
- 志田 敬夫 大原 賢治
- 宮内 智 戸部 正久
- 平尾 孝平 茅野 功
- 細川 恒夫 小林 尙一
- 倉澤 恒夫 藏
- 依田 啓藏
- 萩原 清治 和山 主計
- 清水 運策 小山 滋
- 中村 恒雄
- 川船 卓爾(千曲)
- 井上 柳 梧
- 蒲生 俊興 須田 圭二
- 窪田 潤 山口定次郎
- 香林 清和 和田 主計
- 若林 三郎 田玉龜太郎
- 山本 賢市 枇杷木瀧雄
- 細川 豊 細谷金次郎
- 校長先生銅像製作開始
- 二十五周年記念事業の内最も早く着手

せねばならぬ校長先生銅像製作に付いては六月五日より石井鶴三氏來校、校長室に於て雛型製作を開始され着々進行中である。

振替貯金口座に就いて

振替口座長野六二四三番は『上田蠶絲専門學校創立二十周年記念事業協賛會』でありましたが手續を経て五月十七日より『上田蠶絲専門學校内千曲會』と名義變更になりました。従つて千曲會に於て加入してゐる振替貯金口座は東京第四三三番と長野第六二四三番の二口ある事になりましたが經理の都合上母校創立二十五周年記念事業費醸出金には長野第六二四三番を御利用願ひます。

上田の新國道



母校養蠶科 戸部正久氏撮影

醸出金第一回納入報告

- 金貳拾五圓也 八木 誠 政(蠶三)
- 金五圓也
- 大槻四郎(蠶廿一) 荒木 喬(蠶廿一)
- 市瀬武壽(蠶廿一) 高田正一(蠶廿一)
- 新野元治郎(蠶廿一) 石塚 亮(蠶廿一)
- 大野孝治(蠶廿一) 鈴木正悟(蠶廿一)
- 山岸恒一(蠶廿一) 林 正平(蠶廿一)
- 阪入長治(蠶廿一) 岩本賢次(蠶廿一)
- 松浦彰義(蠶廿一) 田ノ岡實(蠶廿一)
- 市原文雄(蠶廿一) 副田好美(蠶廿一)

- 熊谷俊三(絲廿一) 牛草榮喜(絲廿一)
- 益淵誠正(絲廿一) 白井四良(絲廿一)
- 横澤 平(絲廿一) 北澤常雄(絲廿一)
- 一之瀬茂(絲廿一) 大久保直(絲廿一)
- 金丸 功(絲廿一) 三宅農富榮(絲廿一)
- 高橋 英(絲廿一) 大岩 巖(絲廿一)
- 征矢克郎(絲廿一)

醸出金申込者(第一回報告)

- 十口 蒲生 俊興(蠶一) 松村 季美(蠶一)
- 倉澤 美徳(蠶二) 林 貞三(絲三)
- 六口 須田 圭二(蠶二) 野口新太郎(紡二)
- 五口 福田鑛之助(蠶三) 皆川 二郎(蠶四)
- 田口 博輔(蠶四) 栗原 章(蠶五)
- 小林 茂樹(絲一) 吉澤 武夫(絲四)
- 窪田 潤(絲十二)
- 四口 永田 平(蠶八) 竹村 中和(蠶十)
- 山口定次郎(蠶十二) 黒岩 覺(絲八)
- 萩原 清治(絲十二) 服部 虎雄(紡二)
- 香山 清和(紡三)
- 三口 山崎 壽(蠶十四) 宮崎秋雄(蠶十五)
- 宮本清松(蠶十六) 關 芳雄(蠶十六)
- 小松忠一郎(紡二) 林 太郎(紡三)
- 櫻井 隆夫(紡四) 三宅玉留(紡四)
- 宮下 丈夫(紡四)
- 二口 松本一二(蠶十六) 西澤重光(蠶十七)
- 宮堀俊雄(蠶十八) 大平正三(蠶十八)
- 竹内直人(蠶十八) 宮坂 收(蠶十八)
- 茅野 功(蠶十九) 平尾孝平(蠶十九)
- 濱村一彦(蠶十九) 戸部正久(蠶十九)
- 枇杷木瀧雄(蠶十九) 池内眞吾(蠶十九)
- 清水 洸(蠶二十) 仁尾幾朗(蠶二十)
- 鷹野誠一(絲十七) 桐原達郎(絲十八)
- 須江辨三郎(絲二十) 小林尙一(紡八)
- 草野 弘(紡九)
- 一口 町田 博(蠶廿一) 塚本 優(蠶廿一)

千曲會記事

支會名稱變更

長野縣諏訪郡を區域とせる支會鳴友會は今回諏訪千曲會と改稱せり。

千曲會 日誌

五月廿二日 母校生理學實驗室に於て校内理事の會合を催し執務上に關し諸般の打合せを行ふ。  
五月廿六日 埼玉縣蠶業取締所秩父支所在勤の上原安夫氏(蠶十九)御逝去に就き電報を以て弔慰を表せり。  
五月卅一日 出版物に關し本會と縁故深き明文堂主周防初次郎氏御逝去に就き弔電を發せり。  
六月四日 母校創立二十五周年記念事業費醸出金の件に關し全會員へ依頼狀發送せり。

叙任辭令 (母校之部)

- 五月五日 副手 福地 進
- 願ニ依り副手ヲ免ス 塚本 優
- 五月二十三日 副手 百瀬 正
- 願ニ依り副手ヲ免ス 池内 眞吾
- 五月三十一日 副手 六川 忠一郎
- 願ニ依り副手ヲ免ス 濱村 好美
- 副手ヲ命ス 池内 眞吾
- 六月四日 上田蠶絲専門學校教授 和田仙太郎
- 賜三級俸 大瀧照太郎
- 同 三級俸下賜 (以上六月四日支省)

叙任辭令 (同窓生之部)

- 昭和九年五月一日 從六位 朝倉 昇
- 任朝鮮總督府府尹 朝倉 昇
- 敘高等官五等 朝倉 昇
- 任朝鮮總督府府尹 朝倉 昇
- 文官分限令第三條第一項第三號ニ依り本官ヲ免ス
- 地方農林技師 岡部 康之
- 同 鶴田 定平
- 陸シテ高等官四等ヲ以テ待遇セラル 菅澤 隆三
- 地方農林技師 菅澤 隆三
- 同 勝又 藤夫
- 同 永田 平
- 陸シテ高等官六等ヲ以テ待遇セラル 陸シテ高等官六等ヲ以テ待遇セラル
- 昭和九年五月二日 地方農林技師 南澤 清
- 十一級俸下賜(四月十九日東京府)
- 公立實業學校教諭 野澤 泰治
- 年功加俸年額貳百四圓下賜(四月十三日愛知縣)
- 昭和九年五月十日 愛媛縣立西條農業學校教諭兼舍監 正七位 波多野千里
- 公立實業學校教諭ニ任ス 波多野千里
- 高等官六等ヲ以テ待遇セラル 波多野千里
- 昭和九年五月十一日 公立實業學校教諭兼舍監 波多野千里
- 愛媛縣立西條農業學校教諭兼愛媛縣立西條農業學校舍監ニ補ス(五月十日支省)
- 昭和九年五月十七日 朝鮮總督府府尹 朝倉 昇
- 四級俸下賜鎮南浦府在勤ヲ命ス(五月一日朝鮮總督府)
- 昭和九年五月二十二日 公立實業學校教諭 波多野千里
- 七級俸當分千六百圓下賜 波多野千里
- 公立實業學校舍監 波多野千里
- 加俸年額七拾貳圓下賜(以上五月十日愛媛縣)

昭和九年五月二十四日  
公立實業學校教諭 井出 滿藏  
昭和九年五月十五日ヨリ年功加俸年額  
百八圓下賜(五月二十二日宮城縣)  
昭和九年五月二十五日  
公立實業學校教諭 波多野千里  
年功加俸年額百四拾六圓下賜(五月十  
日愛媛縣)

### 千曲會々費納入報告

昭和八年年度通常會費納入者

(○印は外に製絲學雜誌代)

○宮岡 泰(蠶六) ○山崎修也(蠶十四)  
木曾信雄(紡十一)

昭和九年年度通常會費納入者

(○印は外に製絲學雜誌代)

○平澤 勝(蠶三) 山本賢市(蠶十八)  
平尾孝平(蠶十九) 茅野 功(蠶十九)  
枇杷木瀧雄(蠶十九) 倉澤恒夫(蠶廿一)  
塚本 優(蠶廿一) ○牧島章吾(蠶廿一)  
大木定男(蠶十九) 野口新太郎(紡二)  
小松忠一郎(紡三) 三宅玉留(紡四)  
宮下丈夫(紡四)

入會 金納 入者

完納者

百瀬 正(蠶廿一) 中島正喜(蠶廿一)  
金拾圓也  
高野賢造(蠶廿一) 牧島章吾(蠶廿一)  
吉田義夫(紡十三)  
金五圓也  
西山徳治(蠶廿一) 新野武雄(蠶廿一)  
木曾信雄(紡十一)  
昭和九年年度製絲學雜誌代納入者  
中島正喜(蠶廿一) 三宅農富榮(蠶廿一)  
池田爲雄(蠶廿一)  
終身會費完納者  
藤見豊一(蠶四)

(外に未納會費金五圓也納入)

### 弔慰金報告

故加藤徳四郎氏弔慰金

金五圓也

高田 茂重郎  
金參圓也  
宮田 鐵五郎 三輪 輔  
田口 敏夫 遠藤 文平  
金貳圓也  
蒲生 俊興 森 淳太郎  
川合 軍之助 河合 英一  
志藏 人  
金壹圓也  
高木 三治 大箸 政平  
佐々木 峯二 松田 敬三  
林 貞三 稻石 榮太郎  
伊藤 柳作 土岐 宣治  
合計金參拾五圓也  
遺族贈呈金參拾五圓也

### 上信高原

#### 鹿澤温泉廻遊クイポン

淺間山を起點として北進する山脈は何れも二千米内外の所謂低山趣味的遍歴の山々ではあるが、其の連五する山合ひには、未だ世に知られてゐない大森林や、大溪谷や、また茫々として漚ない高原や牧場があり、更に其の所々には、温い湯類を擧げてゐる温泉がある。  
上田から一、二泊の山歩き、高原めぐり、温泉めぐりなど、若きワンダラーに相應しい旅は、上信國境の山々に見出される……  
『渡り鳥』の運動は、低山趣味を多分に持つ人々には、又と無い楽しみである。離れとした鎖鎖な日常生活から解放され、飄然として何處と云ふ目的も無く山野に、森林に、溪谷に又温泉に、ひたすらに自然の發洩たる生命に觸れやうとしてさまよひ歩く放浪の旅、之れこそ『渡り鳥』の眞の目的ではなからうか。  
當社では、山歩きの一泊のワンダラーの爲めに、左の様なコースに依る鹿澤温泉廻遊クイポンを發行する事にした。  
A 發祥—眞田—角間溪谷—鹿澤温泉—新鹿澤温泉—田代湖—鳥居峠—眞田—眞田—發祥  
B、前記の反對線路  
右のクイポンには左記の費用が含まれてゐる。  
發祥—眞田間 往復電車賃  
眞田—鹿澤間 片道自動車賃  
眞田—鹿澤間又は鹿澤温泉に於ける一泊二食の宿泊費及盡食料  
自動車を利用しないためである。  
鹿澤温泉と新鹿澤の間約四軒新鹿澤と鹿澤の間約六軒は徒歩にした。但し新鹿澤温泉にはバスがあるから別途の費用として之を利用すればよいのである。  
以上のクイポンは、當社線各驛で發賣してゐるが、上田市内各電車驛から發賣してゐる料金は左の通りである。  
上田、北大手、北上田、川原柳各驛より……二圓十錢  
別所温泉驛よりは……二圓五十錢  
詳細は電話で六五四番又は九六五番に御照會になれば、即時御回答申上げらる。

製絲科第三學年校外  
實習派遣工場及學生氏名  
製絲科三年生は既報の如く横濱生絲検査所に於て五月廿八日迄實習をなし六月一日夫々製絲工場に入場したが工場名所在地學生氏名は左記の通りである。  
所 在 地 工場 名 學生氏名  
熊本市内坪井町 肥後製絲株式會社 深井 重一  
全 野本 信次  
京都府綾部町 那那製絲株式會社 戸田 峻三

岡山縣 苦田郡二宮町 全 津山工場  
兵庫縣 朝來郡瀬瀨町 全 梁瀬工場  
福知山市 全 福知山工場  
兵庫縣 八鹿町 全 八鹿工場  
兵庫縣 赤松郡山崎町 同 山崎工場  
津市津興 關西製絲株式會社  
岡崎市 三 龍 社  
愛知縣 木曾川町 木曾川製絲株式會社木曾川工場  
中津市 豐中生絲株式會社中津工場  
兵庫縣 和田山町 日東製絲株式會社和田山工場  
都ノ城市 全 都城工場  
愛媛縣 越知郡富田村 全 愛媛工場  
滋賀縣 大上郡河瀬村 若林製絲所  
愛知縣 安城町 愛三製絲株式會社  
高知市 上本町 片倉製絲株式會社高知製絲所  
岐阜市 全 岐阜田中製絲所  
新潟縣 村松町 片倉越後製絲株式會社  
岡山縣 眞庭郡落合村 作州製絲株式會社  
鹿兒島市 原良町 薩摩製絲株式會社鹿兒島製絲場  
島根縣 平田町 日本製絲株式會社  
福島市 昭榮製絲株式會社福島工場  
神奈川縣 足柄上郡金田村 牧野製絲所  
沼津市 上土町 昭榮製絲株式會社沼津工場  
三重縣 龜山町 龜山製絲株式會社  
津市 三重縣 龜山町 三重縣 龜山町 三重縣 龜山町  
全 昭榮製絲株式會社二日市工場  
福岡縣 二日市町 全 昭榮製絲株式會社二日市工場

### 會員動靜

後藤 健雄 舊職 東京市澁谷區千駄ヶ谷町五ノ八七五  
原 清志 蠶九 矢島製絲株式會社(茨城縣土浦町)  
門田 秀太郎 蠶十 昭榮製絲株式會社(東京市日本橋區吳服橋三丁目七番地)住所(東京市中野區天神町七番地)  
尾藤 省三 蠶十 日東製絲株式會社岐阜研究所(岐阜市辨天町)住所(岐阜市本井中健屋北野神社裏)  
米田 俊雄 蠶十 依用農蠶學校(兵庫縣佐用町)  
内田 訓之亮 蠶十三 昭和製絲株式會社都城蠶種製造所(都城市外沖水村)住所(都城市外沖水村)  
内川 勇 蠶十三 京都府立女子專門學校(京都市右京區西桂)住所(京都市右京區桂木ノ下町二八番地)訂正  
大熊 康代 蠶十三 群馬縣蠶業取締所藤岡支所(群馬縣多野郡藤岡町)  
大越 信 蠶十四 福島縣蠶業取締所掛田支所(福島縣伊達郡掛田町)  
波邊 晋吉 蠶十五 群馬縣蠶業取締所前橋支所(前橋市)  
宮崎 秋雄 蠶十五 天龍社(長野縣下伊那郡飯田町)

Table with 10 columns listing names (e.g., 六川忠一郎, 池内眞吾) and their affiliations (e.g., 上田市海野町, 本校養蠶科園場部).

唐澤正 紡十三 本校絹紡織科
山田正 紡十三 本校絹紡織科
土屋正 紡十三 本校絹紡織科

左記諸氏宛の千曲時報は返戻せり。最寄の方は御報知を乞ふ。
岡山市七軒町一八 甘樂社東盛社(群馬縣北甘樂郡)
甘樂社東盛社(群馬縣北甘樂郡)

貴重なる紙面を御借りして一言退職の御挨拶を申し上げたいと存じます。
願われれば昭和七年四月光輝ある歴史を有する上田蠶絲専門學校に御厄介になりまして以來今日に至る迄滿二ヶ年皆様の特別な御同情に依りまして大した過も無く今日の日を迎へ得た事を衷心感謝致す次第で御座います。今度一身上の我儘から學校に對し又校長先生に對し無理な御願ひを致したての御座います。御許し下さいまして、退職させて頂く事になりました。餘りに短い年月で何一つとして爲したる事なく、唯々皆様に御迷惑をお懸けしたに過ぎず、今思ひ返して汗顔の至りに御座います。

若輩にして経験とて非常に薄私で御座いましたので職を奉じ乍らも事々に自分の貧弱さを思ひ、基礎工作の不完全を考へ、せめて之の基礎工作のみでも今少しく築き度う存じましたので今度母校研究科に入學致しまして再度の學生生活を始めました次第で御座います。
昭和九年初夏 赤尾英三

謹啓 初夏の候益々御清穆の段奉賀上候 陳者小生儀上田蠶絲専門學校在職中は公私共多大の御厚情を賜はり難有御厚禮申上候
此度一身上の都合に依り前橋工業試験場に轉任致す事と相成候間今後共倍舊の御指導御鞭撻賜はり度伏して奉懇願候
先は紙上御禮旁々御挨拶申上度如斯に御座候 敬具
昭和九年六月 大木定雄

拜啓 深縁の候同窓諸兄には益々御健勝の段賀し奉ります。
陳者今回私達は御蔭様にて母校を卒業致し都合に依り母校に副手として留り斯業の研究に専念する事になりましたから今後どうぞよろしく御願ひ致します。
まづは取敢へず紙上を以て御挨拶申上げます。
昭和九年六月 濱村一彦 養蠶科原蠶部 副田好美 蠶絲化學教室

謹啓新緑の候益々御清穆の段奉賀候陳者不肖儀今般本縣職員小異動に際し突然縣蠶業試験場小淵澤支場長を命ぜられ過日赴任候 今後共何分の御指導を蒙り度奉懇願候 當地は一化性夏期飼育の好適地として御か名を得たる所に有之盛夏眞に凌ぎ候御序も有之候は是非御立寄被下度御待ち申上候 先は略儀乍ら紙上を以て御挨拶申上度如斯に御座候
山梨縣北巨摩郡小淵澤村 縣蠶業試験場小淵澤支場 栗原章
昭和九年六月

編輯餘滴
近頃母校内の人々の間に本紙を菊版位の小冊子式のものにしてはと云ふ様な意見が擡頭してゐる。
編輯者も大勢の赴く處に依つてはさうしてもいふと思つてゐる。小冊子にすると同じ紙量に對し一〇%位字數が減少すると云ふ様な經費上の損失があるが保存に便利な事及び枚數の變更が容易である等は特筆したい利點である。敢て急ぐ必要は無いが同窓諸氏の御意見を承り度いものである。

會員諸氏の時報の利用がどうも足り無様に思へてならぬ。もつと依頼したり依頼されたりする方面に活用して貰ひ度い。こうした方面に對しては無料又は極めて廉價に出来る丈便宜を計り度いと思つてゐる。

支部通信と云ふ様な欄を常置し度いのだが今の處とんと材料が來ないので手が出せぬ。お忙しいではあらうけれど御執筆を御願ひする次第である。

先回の紙上にも一寸書いたが本紙の編輯上氣付かれた點や創案があつたら致へて戴き度い。經費と手間の許す限り貴意に副ひ度いと思つてゐる。

上田高女で一万五千圓を以て同窓會館建設を可決したとさうである。二十五周年記念事業を控えた今日他山の石とはなれません。
云ひおくれたが先月から印刷所を變更した。市内なので編輯子丈には至極便利である。